

あらゆる人の幸福を考える

仏教と

金子みすずの詩

みんな違ってみんないい



1) 仏とは

さびしいとき

わたしがさびしいときに、
よその人は知らないの。

わたしがさびしいときに、
お友だちはわらうの。

わたしがさびしいときに、
お母さんはやさしいの。

わたしがさびしいときに、
ほとけさまはさびしいの。



仏さまとは何か。これは永遠の問いである。この詩では、仏さまとは観音様のような人である。悩み相談である方が「私を無条件で受け止めてくれる人が居ない」と嘆いた。善人も悪人も無条件で受け入れる。それが仏さまの本質であろうか。

真言宗では即身成仏という。この世で、この身体で、自分が仏になるのである。そのような人になるのは難しい。

2) 心とは

こころ

おかあさまは

おとなで大きいけれど、

おかあさまの

おこころはちいさい。

だって、おかあさまはいいました、
ちいさいわたしでいっぱいだって。

わたしは子どもで

ちいさいけれど、

ちいさいわたしの

こころは大きい。

だって、大きいおかあさまで、

まだいっぱいにならないで、

いろんなことをおもうから。

大日経に「菩提心を因とし 大悲を根とし 方便⁽¹⁾を究竟とす」とある。大悲とは「母が子を無条件にいたわる愛情を分け隔てなく誰にでも及ぼす太陽のような無限の愛である。覚りの心とは、その根底に、この大悲を据えて、その上に無限の虚空を据える。思いやりという大蓮華の上に無限にものを入れる巨大な容器である。

覚るとは、「あらゆる有情の気持ちをも全て分かることだ」とある。この世に70億人居るなら、その70億人の心を知る。

確かに心は無限の容器だ。その菩薩は虚空蔵菩薩。

それに比べて我欲の強い私はなんと視野（選択肢）の狭いことか。

(1) 方便とは実際の行動。行動して初めて意味がある。



3) 無知を知る

星とたんぼぼ



青いお空のそこふかく、
海の小石のそのように、
夜がくるまでしずんでる、
昼のお星は目に見えぬ
見えぬものもあるんだよ、
見えぬものもあるんだよ、
ちつてすがれたたんぼぼの、
かわらのすきにだあまつて、
春のくるまでかくれてる、
つよいその根は目に見えぬ。
見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬものでもあるんだよ。

死んだらごみになる。そうかもしれない。目先のことに振り回されて、遠くを見ずに、自分勝手に生きるなら、そんなことも言うよう。

日本の人々は、恥じるとか、思いやるといふことを忘れて久しい。人の良さとか、律儀さとか、それは見える人にしか見えない。

仏は五つの神通眼を持つという。

遠くのことが見えること。

自分の過去が見えること。

自分の未来が見えること。

人間の善悪が見えること。

人の心が見えること。

たとえば、人間がこの世に生まれてどんなことをしてきたか。助け合った人も居れば、殺し合った人も居る。地球の裏側で飢えている人々を気づかった人も居れば、自分の蔵だけ建てた人も居る。見えると見えないとでは雲泥の差がある。

4) あの世

花のたましい

ちったお花のたましいは、
みほとけさまの花ぞのに、
ひとつのこらずうまれるの。

だって、お花はやさしくて、
おてんとさまがよぶときに、
ぱつとひらいて、ほほえんで、
ちようちよにあまいみつをやり、
人にゃにおいをみなくれて、

風がおいでとよぶときに、
やはりすなおについてゆき、

なきがらさえも、ままごとの
ごはんになつてくれるから。

やさしい布施の人は仏さまの花園に生まれる。
戦争好きの動物はどうなるのだろうか。
それは考えまい。



5) 慈しみ 親愛
みんなをすきに

わたしはすきになりたいな、
何でもかんでもみいんな。

ねぎも、トマトも、おさかなも、
のこらずすきになりたいな。

うちのおかずは、みいんな。
おかあさまがおつくりになったもの。

わたしはすきになりたいな、
だれでもかれでもみいんな。

お医者さんでも、からすでも、
のこらずすきになりたいな。

世界のものはみいんな、
神さまがおつくりになったもの。



みんな好きになりたい。それは仏教では発心^①という。みずずさんは生まれながらに発心の慈悲心を備えている。そしてついに「みんなちがって、みんないい」という仏様の境地に到達したのだろう。

仏さまはこの世の創造者ではない。この世の落とし子である。仏さまはこの世の写し絵でありこの世そのものである。仏は楽しいときには密かに居られ、苦しいときに出て来られる。楽しいことだけがあれば良いだろうか。しかし極楽には蓮の花は咲かない。苦しさを悲しさの汚泥の中に綺麗な蓮は咲く。真に苦難を克服する人は優しい。克服できずとも他人の痛みを砕く人は仏様の側近である。この世の全てを好きになる。そうできる人は幸せなのだ。

(1) 発心には①向上心②慈悲心の二つがある。この発心が確立しないと修行は完成しない。仏教入門①に詳説。

6) 大悲 悲観 悲しみを観る力

大漁

朝焼小焼だ

大漁だ

大ば鰯の

大漁だ

浜は祭りの

ようだけど

海のなかでは

何万の

鰯のとむらい

するだろう



大悲・悲観とは、見えない苦るしみへの想像力である。日本人は己の罪を忘れた。

罪とは他人を踏んづけて気がつかない無知である。

全ての宗教は罪の意識から始まる。

なぜなら、生きるとは他人との出会いにあり、出会いは友好であれば良いが、友好とは限らない。愚かな私たちは先ず自分の屋敷を建てて、軍備を増強する。そして戦争をしてぶつかり合い奪い合い悔いる。

「他人を先にして自分を後にするが仏道」と空海大師は言う。自分を闇雲に走らせる見えない矢⁽¹⁾を抜き、我慢を捨てて慈悲行をなす。

かつて日本人は情を重んじた。

人の痛みを知るとのこと。

この第一歩がなければ、仏には

永久に会えない。

真の幸福は得られない。

(1) 見えない矢とは私たちに刺さり、突き動かして好物へと走らせる欲望や物である。詳細は仏教入門2と仏教入門3参照。

5) 因果

次からつぎへ

月夜にかけふみしていると、

「もうおやすみ」とよびにくる。

(もつとあそぶといいのになあ。)

けれどもかえってねていると、

いろんなゆめがみられるよ。

そしていいゆめをみていると、

「さあ学校」とおこされる。

(学校がなければいいのになあ。)

けれど学校へでてみると、

おつれがあるから、おもしろい。

みなでしろ取りしていると、

お鐘が教場へおしこめる。

(お鐘がなければいいのになあ。)

けれどお話しきいてると、

それはやっぱりおもしろい。

ほかの子どももそうかしら、

わたしのように、そうかしら。

因果は恐ろしい。

生きているとは出会いの連続である。そして出会いは多者択一の連続である。取るか捨てるか、右か左か、はたまた別か、どれを選ぶかの選択の連続だ。だから、先ず多様な選択肢が見えねばならない。

善へ転げば楽へと転がっていくし、悪へ転げば苦へと転がっていく。では善と悪の違いは何か。

人間は往々にして快樂に落下し損得に血迷う。

悪とは、それをなせばひいては他人が苦しむこと、自分が苦しむことである。これぐらいはよいだろうと取っかかりに転ぶと次々と転んで蟻地獄へ行く。思い切つて善行をなせば、人生は大きく転換する。その二股あるいは多肢の分岐を発見し、しっかりと選び取るのが智慧である。

この世は短く長い。悪を続ければ永遠に地獄を巡る。仏道の坂を登り峠を越えてこそ、真の人生は開ける。その為には仏の智慧の選択決断が必須である。みずずさんの詩には仏の智慧が満ちている。

他人は自分の鏡・善因善果・和顔愛語

こだまでしょうか

「遊ぼう」っていうと「遊ぼう」っていう。

「ばか」っていうと「ばか」っていう。

「もう遊ばない」っていうと

「遊ばない」っていう。

そうして、

あとで

さみしくなって、

「ごめんね」

っていうと

「ごめんね」

っていう。

こだまでしょうか、

いいえ、だれでも。



喜ばれる喜び

日の光

おてんと様とお使いが

そろって空をたちました。

みちで出会ったみなみ風、

(何しに、どこへ。)とききました。

ひとりは答えていいました。

(この「明るさ」を地にまくの、

みんながお仕事できるよう。)

ひとりはささもさもうれしそう。

(わたしはお花をさかせるの、

世界をたのしくするために。)

ひとりはやさしく、おとなしく、

(わたしはきよいたましいの、

のぼるそり橋かけるのよ。)

のこったひとりはさみしそう。

(わたしは「かげ」をつくるため、

やっぱり一しょにまいます。)

幾つか元気になる詩

▼辛いときは力が湧くのを待つ

足ぶみ

わらびみたよな雲が出て、
空には春がきましたよ。

ひとりで青空みていたら、
ひとりで足ぶみしましたよ。

ひとりで足ぶみしていたら、
ひとりでわらえてきましたよ。

ひとりでわらってしていたら、
だれかがわらってきましたよ。

からたちかきねが芽をふいて、
小みちにも春がきましたよ。

▼思いのままに

朝顔のつる

垣がひくうて朝顔は、
どこへすがるとさがしてる。

西もひがしもみんなみて、
さがしあぐねてかんがえる。

それでもお日さまこいしゅうて、
きょうも一寸またのびる。

のびろ、朝顔、まつすぐに、
納屋のひさしがもう近い。

▼時間なんか忘れよう

こよみと時計

こよみがあるから
こよみをわすれて
こよみをながめちゃ、
四月だというよ。

こよみがなくても
こよみを知ってて
りこうなお花は
四月にさくよ。

時計があるから
時計をわすれて
時計をながめちゃ、
四時だというよ。

時計はなくても
時間を知ってて
りこうなとりは
四時にはなくよ。

▼名前に拘るな、ケセラセラ

本来は皆一緒

草の名

人の知ってる草の名は、
わたしはちつとも知らないの。

人の知らない草の名を、
わたしはいくつも知ってるの。

それはわたしがつけたのよ、
すきな草にはすきな名を。

人の知ってる草の名も、
どうせだれかがつけたのよ。

ほんとの名まえを知ってるのは、
空のお日さまばかりなの。

だからわたしはよんでるの、
わたしばかりでよんでるの。

▼苦難こそが人生をつくる

土

こつつん こつつん
ぶたれる土は
よいはたけになって
よい麦生むよ。

朝からばんまで
ふまれる土は
よいみちになって
車を通すよ。

ぶたれぬ土は
ふまれぬ土は
いらぬよ。

いえないそれは
名のない草の
おやどをするよ。

この世に不要なものはない

私と小鳥と鈴と

私が両手をひろげても、
お空はちつとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面^{じべた}を速くは走れない。

私からだをゆすつても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように
たぐさんの唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

人に上下なし、ところが目立ちたい、得したい、役に立ちたい、「我こそは」と思う一心が、最も危険な妄想を起こす。これを我慢という。勝った負けたと羨望し蔑視する。そして上下社会を好んでつくり媚びては誰かを見下して安住する。これ煩惱なり。人には上下も中心もない。思いやりのあるところ、その至る所に中心はある。それ仏の世界なり。そのとき、すべてがそれぞれに光り輝く。

本来無東西 人に上下なし 学ばずと学ばざるもなし なしを上座とする
人に上下をもよおすは妄想なり これを我慢という



生きるとは苦しみである。

原爆が炸裂し、肉が溶け、心が呻吟した。

力や幸運を持ち合わせたものは、高級車に海外旅行を重ね、

生活困窮者は、我が子を飢えさせ明日を恐れぬ日を送る。

夫が交通事故にあい、その日から家庭は底辺の生活になった。

人は、動物実験をする。人体実験を。拷問を。そして我が身は痛まない。

生物世界は、弱肉強食、食い合い、傷つけ合いの世界である。

生命は、自分を保持する物、食物、空気、重力、自然、地球、太陽、宇宙がなければ生きていけない。

生命は、他の生命を食わずには生きていけない。

生命は、ひとりでは生きていけない。

生命の歴史、人の歴史は、殺戮と、恐怖と、残酷と、悲惨の歴史である。

生命は、絶えず不安にさらされている。

人は、飢えに苦しむ。

人は、病気になる。

人は、老いる。

人は、恐れる。誰かが襲ってくる。この自分のように小心で凶暴な奴が。

人は、常に周囲を気にし、将来を恐れなくてはならない。

人は、いつも不満に襲われる。

人は、より心地のよいものを欲しが。より美味しいもの、より美しいもの、手触りのよいもの、刺激的なもの、贅沢品を欲しが。る。

人は、他人と比べて、勝った負けたと意識し無意識に思い、嫉妬する。

人は、得るにしがって飽きる。

人は、自分に安らぐことができない。物で心を満たそ

うとする。

他人の目を気にし、人に認められて安心しようとする。
人は、今、現在の自分を楽しみ続けることができない。

人は、競争する。

人は、必要以上に他人に勝とうとする。

人は、他人を支配しようとする。

人は、自分の支配領域を拡大し続ける。所有を増やす、奢る、心を太らせる。

人は、時々、他人の不幸を喜ぶ。

人は、他の心をもてあそんで自分の心を慰めることがある。

生命は、自分を知ることができない。

自分を理解することさえ難しく、制御することはなおさらである。

人が知っているのは、自分を満足させるにはどうすればよいかであり、

自分が何をしているか、自分が何者か、ではない。

人は、自分の正体を知らずに活動する、煩惱の手下で

ある。

人は、食欲や性欲の起こることは知っていても、自分で欲を起こすことはできない。欲は勝手に起こり、我々は、ただ、欲を満たそうと駆け回る。

人が、意識できるのは、私や世界のほんの一部分に過ぎない。

私を知っているのは、私の欲が駆け抜けた軌跡のみであり、

欲の手先となった私突き当たった事柄についてのみである。

心は、すべてをそのままに受け入れようとはしない。

心は、世界を二分し自分や自分の味方を、良いものと見ようとする。

心は、敵や一度過ちをした者を、悪く見ようとする。心は、自分の悪いところを認めようとしなない。

心は、自分の自尊心や、潔癖心を守ろうと、嘘の自分と嘘の世界を描く。

心は、自分の都合のよい世界観に沿って物ごとの善し悪しを決めつけ、

うまくいくと自分や味方の手柄と見、調子が悪いと人のせいにする。

心は、どこまでも広がっているようだが、実は、どこかに壁を作り、敵を作っている。

そして、自分の汚い部分をなすりつける自己免罪の為のスケープゴートをつくりだす。

しかし、

人は、自分を知る手がかりをもっている。過去を照らすことができる。

自分に光を当てることができる。次の一步を決定することができる。

利己心が強い一方、自分に引き当てて他者を思いやる気持ちを持っている。

飽くなき欲望の一部に向上心がある。

だから、

自分を良く知ることである。

すべては、自分の考えた世界なのだから。

自分の考え方、湧き出る欲望を変えることである。

自分の、意欲を変えること、深い深い自分を変えることである。

行動を変えることである。

自分とは、深い深い自分と、世界の無尽のからみあいの者であると知って、自分を変えるときともに世界に正しく働きかけ、あらゆる命の調和のために行動することである。

思うとは、自分の世界⇨体内の中で正しく行動すること。行動するとは、実世界⇨宇宙の中で他と自分とを正しく結び付けることでなくてはならない。

つまり、

生命は、無反省にそのまま生きたのでは他者を苦しめ自分も苦しむ、生まれながらに不幸な生き物にすぎない。

しかし、この苦しみは、そのまま耐え忍ぶべきものではなく、自己を作り変え、世界の仕組みを作り変える

ことによつて無くしていけるものである。
苦しみは克服できる。

「だれひとり不幸であつてはならない」という目標のもとに皆が身を投げ出して努力することこそ、仏の示された無上の道である。

また、この時にこそ、身を震わさずにはいられない生命の高まりがある。

この感動こそ、生存の苦しみを乗り越える唯一の方法でもある。

それ以外に、どのような宝が我々に与えられているか。

最高の宝とは、自分で自分を越えること、世界を変えることである。

命のひとりひとりが皆、宇宙の運命を背負っている。

神も仏もない、だから私が仏に成るよりほかにない。私かあなたが仏になったとき、はじめて仏は居たことになる。仏は居ないにもかかわらず居る。常に私達の心の中に。仏とは、我が心である、我が身であると。それ以外には、我々は、何も与えられていない。

これがすべてなのである。供養とはただほとけを拜むことでは決してない。人の心がわかること。

人の痛み、情けが分かる事である。

それは、仏のマントラ 〓 血の流れ 〓 仏の心をこの世にありありと事実あらしめることである。

生きるとは、自分を変えることである。自分を幸せにすることである。

心の底から自分をしあわせにすることである。

生まれてきてよかったと。ああよかったと。ほんとによかったと。

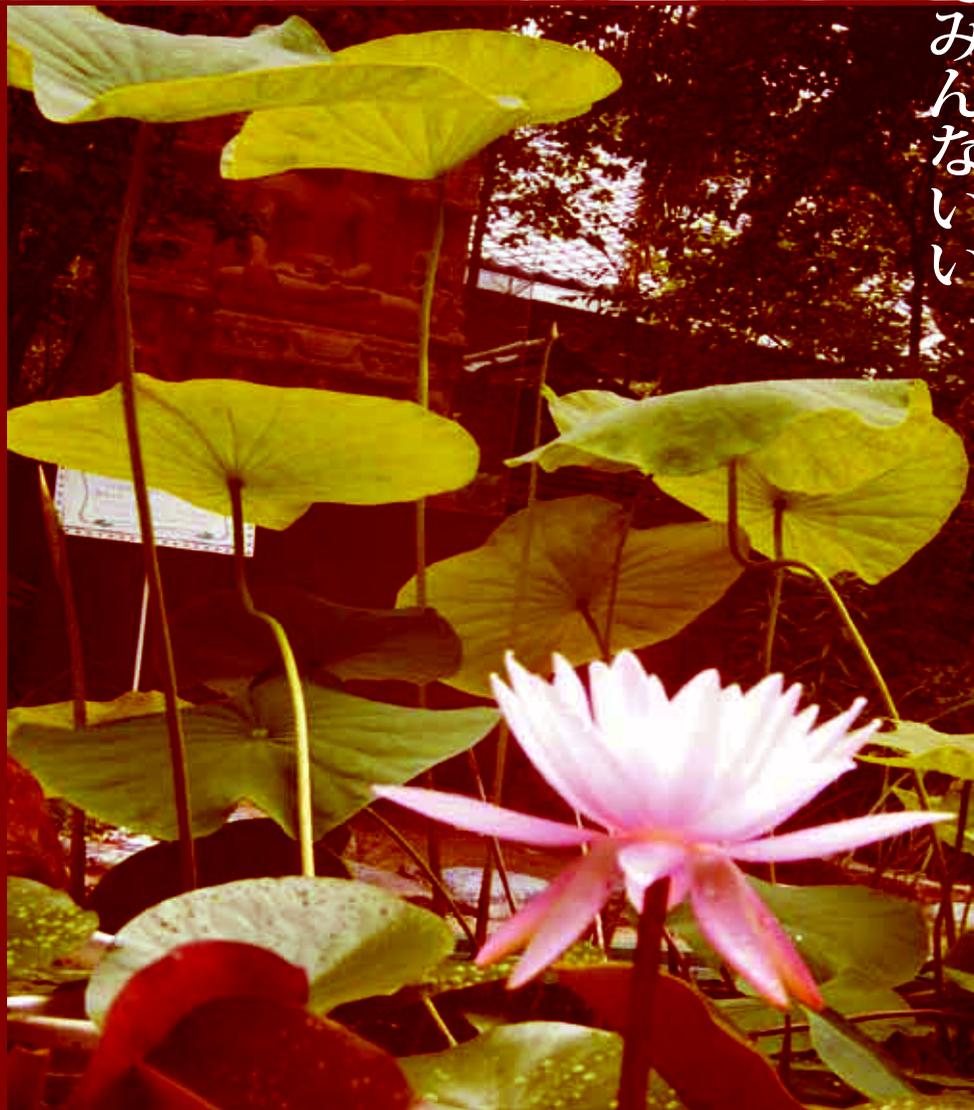
心の底から。

君には聞こえるか。あの人の心の疼きが。この心の痛みが。

聞こえなければ何度生死を繰り返しても、生まれ死んでもがいても、真に生きたことにはならない。ただ苦しみに楽しんだことが残るだけ。

それでいいのか。生きるとは。

みんなちがってみんないい



発行 愛媛県松山市石手2・9・21 石手寺加藤俊生 [HP // nehama.net](http://nehama.net) ☎ 089-977-0870
仏教入門 1〜4、スッタニパータ、遍路、三教指帰、仏教と憲法など多数発行 ご参照ください